

くまにち 論壇



恵泉女学園大学長

大日向 雅美

おおひなた・まさみ 発達心理学。母性愛神話の畏「女性の一生」「自己肯定で幸せ子育て」など著書多数。

「今どきの」から始まる言葉は、常識を超えた理解がたい出来事を指すことが多い。そこに「若者」と続けば、年配者が若い世代に向けて苦言を呈する言葉となる。古代エジプトのパピルスにも記され、日本でも平安時代の『枕草子』や鎌倉時代の『徒然草』に登場している。世代間ギャップは古今東西、普遍の現象なのだろう。

とはいえ、年配者として自戒すべき点も少なくない。とりわけ、近年の少子化をめぐる言説に触れる度にその思いを強くする。日本社会は本格的な人口減少に突入しており、社会や経済、地域の暮らし全般に深刻な影響が及ぶことへの危機感が高まっている。

今年3月、民間組織「未来を選択する会議」が公表した「人口問題白書」は、1974年の政府審議会以来となる本格的な白書であり、少子化の現状を示す精緻なデータと識者の提言から構成されている。注目されるのは「一生結婚するつもりはない」という独身者が急増している一方、希望子ども数も大幅に減少していることだ。「理想の相手に巡り会えない」「自由や気楽さを失いたくない」「必要性を感じない」「子育てや教育にお金がかかりすぎる」な

「今どきの若者」の不安

どが理由の上位を占めている。

問題は「この結果をどう解釈するか」である。「結婚マッチング支援だ」「子育てへの手厚い現金給付だ」と国や自治体が施策に拍車をかけようとするのは想像に難くない。もちろん、こうした支援策には必要な面もあるが、若者たちの心の奥底を見ない対症療法的動きとなることが懸念される。

有事とされる少子化への対策であれば、表面的には異を唱えないが、年配者の心の内はどうだろう。「今どきの若者は何とせちがらいのだ」「自分本位に過ぎる」「自分たちは自分のことは二の次にして子育てに尽くしてきた」「必要性で人生を判断するとは効率的に過ぎる」と苦虫をかみつぶすような思いの人もいるかもしれない。

しかし、大学や地域のNPO活動で若い世代と接していると、彼らの別の顔が見えてくる。「結婚したくない」「子どもを持ちたくない」のは自分本位だからではない。むしろその逆で、相手を傷つけること、自分も傷つくことへの言葉にしがたい恐れがあるのだ。

夫婦間のすれ違いや家庭内離婚のつらさを身近に見たり経験したりして、自分が家庭を持つことに踏み切

れない。子どもを産んでも、その子が将来幸せに生きていけるのか、未来の輪郭が描けない。子どもに何かあったら、自分の人生そのものが否定されてしまうのではないか。などと、その繊細さゆえの揺れと不安が前に進むとすると背中を押しとどめてくれるように。

少子化を真に憂えるのであれば、若者たちが未来に希望を持たず、複雑化した人間関係に傷つきやすくなっている今の社会をつくってきたことに対する省察こそが必要だろう。「安心して失敗ができる」「誰かと支えあえる」という実感を持てる社会でなければ、若者は前に踏み出せないのだ。

WEB漫画「今どきの若いモンは」の作者・吉谷光平氏は、今の若い人々を「チンゲンサイ」と評している。「沈黙」「限界まで言わない」「最後まで我慢」の頭の音をとった表現。若い世代の繊細さと人間関係の不器用さを温かく見守る、この人のまなざしに見習いたいと思う。

最後に、数年前のNHK大河ドラマ『青天を衝け』のインスパイアードソング『偉人』(Vaundy)が最近、若い世代の一部で話題だという。△理想郷探した 誰より早く 間違ひなく辿り着くために▽から始まる歌詞は、大人になろうとするひたむきさと苦悩が全体を貫いている。△先生 ここにあるものじゃ全然足りなかった▽と繰り返され△悲しみが未来をそう、作っているって▽と続く。悲しみをばねに立ち上がるうとする子どもの姿に胸を打たれる。

「今どきの若者」は私たちが育てた世代だ。批判ではなく、痛みを分かち合う愛おしさをこめて、彼らを見守りたいと思う。